

ずいそう

出雲弁あれこれ

金坂俊孝



退職して早いもので6年半がすぎた。その6年半前、実家に老父母を残しての転勤生活にもやっとピリオッドを打つことができた。私の実家は、島根県松江市の郊外の農村地帯にある。公務員を退職して実家に戻った私は、どうもしっくりしない日々が続いた。長い間家を空けた反動で、自治会などの役員が一気に回ってきたため、会合などで毎日のように地区の人々と接触しなければならない。みんな幼なじみであり、知ったものばかりであるが、どうもしっくりいかないのである。

松江市、出雲市を中心とするいわゆる出雲地方は、独特の方言があることで知られている。世でいう「ズーゾー弁」である。私自身、長い県外生活によりその使い方がやや下手になっていたのである。例えば、近所の人たちと交わす言葉で「だんだん」が言えなくて「ありがとう」と言ってしまうのである。それはそれでよいが、少し「よそよそしい」と受け取られるわけである。また、その地域の人から見れば発音も「よそよそしく」聞こえているのではと思える。特に出雲弁の特徴の一つは、「し」と「す」の発音を全てその中間で発音するので、聞いていると皆同じに聞こえるのである。例えば、食べる「寿司」も煙突の「すす」もすべて同じに聞こえるのである。さらに特徴的なことは、「り」「る」「れ」の発音が苦手で長音化することである。「誰が会長をするのか」と発音するところを出雲弁では「だーがくわいちょーをしーかや」となり、「にぎりめし」は「にぎーめし」となるのである。また、「ひ」の発音も大変苦手な地域である。例えば「飛行機に乗るか」は「ふこーきにのーか」であり、「大勢の人がいました」は「おおぜーのふとがおらっしゃった」である。

このように、独特の発音と共に二つ目の特徴は、豊富な語彙群である。その中で最もポピュラーなのが最初に述べた「だんだん」(ありがとう)である。この語源は、京都の遊郭などで使われていた挨拶語といわれており、なかなか優雅な言葉である。「らしがない」(乱雑である又はむちゃくちゃという意)も古くは京都で使われていた言葉である。また、「げし」(崖)、「ごせ」(くれないか)、「はげる」(はめ込む)、「ちばえる」(戯れる)などの言葉は万葉集に使われているそうである。この他に「ねまる」(座る)、「まくれる」(転ぶ)、「ひまぐらし」(眩しい)、「おぞい」(怖い)、「かいしき」(全く)、「ちょんぼし」(少し)、「はいごん」(騒ぐ)等も出雲では日常の会話で使われているが、これらも日本の古語といわれている。おもしろいなと思える言葉に「たばこしてやーなはい」(休憩し

てやりなさい)、「おんぼらと」(ほのぼのと)、「ばくらとする」(安堵する)、「えらくらし」(いらいらする)、「おちらと」(ゆっくりと)等があり、このような言葉を独特の言い回しで巧みにしゃべる出雲の人々の会話は、ユーモラスでほのぼのとしたものを感ずる。この、ほのぼのらしさが出雲弁の三つ目の特徴といえる。語り口が温和で、スローペースであると共に動作が鷹揚であり、しかも、ズーゾー弁では早口にしゃべることは難しいから、自然とゆっくりとした話し方になり、全体として温和に聞こえるのである。出雲のような固定した人間関係の中では、きつい語感、激しい話し方は嫌われ、良好なコミュニケーションは生まれない。

帰郷して6年半がすぎた今では、自治会の役員も数々務め、地域の人々と出雲弁でうち解けた話ができるようになった。

出雲は箱庭的な地域であるという人がいる。北に日本海、南と東西が山で包み込まれたような地域であって、人々の交流も少なく、それでもって豊かな農業生産力や水産資源が有り、古代から豊かな地域であったといわれている。従って、他地域との交流の必要もなく、閉鎖的で孤立した地域として存続し続けたのではなからうか。そのような環境で、周辺地域と全く異なる「出雲弁」が生まれたものと想像ができる。

晩秋のある日、田圃の端で近所のAさんとBさんがこんな会話をはずませていた。

Aさん：ただもんだんだん、朝晩だいぶんしじしげになってきたのー。いねかーはもーおわーましたかね。

(いつも有り難うございます、朝晩はだいぶん涼しくなってきましたね。稲刈りはもう終わりましたか。)

Bさん：なーんが！ 毎日、しちかちばっかしちょーもんだけん、まだおわーませんがね。(なーに！毎日ぐずぐずしているからまだ終わりません。)

Aさん：あら、そげなことかね。はやにせんとまつーがくーがね。てごさかね。(あら、そんなことですか。早くしないともうすぐ秋祭りだよ。手伝ってあげようか。)

Bさん：だんだん、だんだん、いや！ まつーまでにはまねあわせーけん。(有り難う、有り難う、大丈夫だよ、秋祭りまでには間に合わずから)

このように、出雲弁は出雲地方に古来から伝わる大切な文化であるが、最近では若者から出雲弁が失われつつある。伝承していく必要性を強く感ずるこの頃である。